

第64号

2019年11月15日発行

発行所

社会福祉法人日本キリスト教奉仕団
障がい者総合福祉施設アガペセンター
〒252-0002 座間市小松原2-10-14
TEL 046-254-7111 FAX 046-255-2915

ホームページアドレス

<http://www.agape-jcws.com>

AGAPE

アガペ

アガペを二〇年支えて思うこと

サポートセンター長

府川 孝臣



昨年度より、サポートセンター施設長に就任し、この度、この原稿を書かせていただくことになりました。私が過ごしてきた二〇年を振り返ってみると、改めて様々な「出会い」にあふれていると感じます。

私が入職したのは、一九九九年四月、新しく開所したアガペ吉番館の生活支援課でした。当時は、五〇名の入居者と二十五名の同期支援員でスタートしました。オープニングスタッフということもあり、先輩もいない中、全員でアイデアを出し合い、様々な支援を構築していきました。今とは違うシフトや支援体制の中、無我夢中でフロアの端から端まで動き回っていたことを思い出します。特に思い出深いこととして、二泊三日で行った北海道旅行、ゲ

ストルームでの年越しプログラム、三浦での傾斜のある山で車椅子を押しながらのみかん狩り、視力と聴力障がいがある方と個別外出で行った鈴廣のちくわ作り体験など、挙げればきりがありません。

吉番館で勤務した十年だけでも、語りつくせないエピソードがある中、十一年目には、今勤務しているアガペサポートセンター地域支援課に異動となりました。在宅生活が基盤となっている通所利用者さんへの支援は、また違ったアプローチとなりました。二十四時間体制の入所施設とは違い、十時〜十五時の短い支援提供時間で、少しでも



朝の体操風景

満足し笑顔で帰宅していただくよう、マンネリにならない創意工夫で、日々努力を続けています。

私は二つの課で勤務してきましたが、その中でも数多くの利用者さんとの出会いや別れがありました。別れはどんな形であれ、悲しく、つらいことではあります。しかし、その別れが私やその方に関わった人たちの成長につながっていると思います。そして、別れがあれば、新たな出会いもあります。この出会った意味を深く考え、大切にしていかなければと思っています。

これまで二〇年にわたり勤務し続けてこられているのも、多くの利用者さんと一緒に働いている仲間がいたからこそです。そこには、数多くの叱咤激励や時には思いっきり笑い、時には思いつきり悩むこともありました。それらの過程を経て、利用者さんの笑顔や満足感、そして何より、「楽しかった。」「嬉しかった。」と言っていた瞬間は忘れることはありません。

何度でも笑って、楽しく、「アガペに来てよかった。」と言って、生活していただけるよう、これからも自分自身が皆様に支えられているだけでなく、おこがましくはありますが、利用者さんの生活の一助になれるよう一生懸命、勤務していききたいと思えます。

当たり前前の生活とは

アガペ壱番館館長 元田 勲

アガペ壱番館は、生活の場なので、食事は食べたいときに食べて、お風呂は入りたいときに入る、でも良いはずです。もちろん健康面や、生活のリズムを考えたら、必ずしも良いとは思いませんが、私たちの生活は、日中の過ごし方にあわせて、食事をとる時間や場所は変わりますし、お風呂に入るタイミングも変わってきます。「夏は毎日入るけど、冬は一日おきでもいいか」など、たくさんのお選びができます。私たちにはそのような自由がもととあって、選びとって生活をしています。

一方でアガペ壱番館の生活では、食事、入浴の回数、時間は決まっています。しかし、「ここは福祉施設なので仕方ありません」では、障がいのある方の当たり前前の生活には、永遠にたどりつきません。だから、「今よりも当たり前前に、今よりも普通に」と毎日、私は考えています。

施設ではなく住まい



アガペ壱番館の「施設であって施設ではない」という考えは、建物の随所に散りばめられています。



かつてはこのように利用していました

アガペ壱番館という名称もマンションの名前のようです。館内のブラケット照明も、廊下を道に見立てて、街灯を模したものです。入居者の部屋番号は「番地」になっています。入居している方の、住所は「小松原二一〇一四 アガペ壱番館 東〇〇番地 〇〇さん宛て」となります。そして、各部屋にはポストがあり、郵便物が投函できるようになっています。実際には、郵便物は手渡していることがほとんどですが、当たり前前の生活がデザインに採り入れられています。

二十年の歳月が流れ、住んでいる人も、建物も、世の中も、私も年を重ねました。変わったこともたくさんあり、当初の想定とは異なることもあります。しかし、当たり前前の生活を目指す考えや思いは変わりません。障がいのある方の当たり前前の生活を目指す途上であると、私は考えられています。

(聞き手 野村 墨)

冬にご用心

診療所看護師 塚田 かおり

もうすぐ冬がやってきます。寒くて乾燥する冬は、ウイルスが大活躍する季節です。ウイルスとは、風邪やインフルエンザ、食中毒の原因となる微生物です。ウイルスは日本の冬が大好きなのです。今回は冬のウイルスについてのお話をします。

感染症を起こす原因となるものは、ウイルスと細菌があります。ウイルスは低温・低湿度を好み、細菌は高温・湿潤を好みます。ですから、夏は菌が繁殖しやすくなり、冬はウイルスが活動しやすくなり増殖するのです。

ウイルスは、冬の乾いた空気により、その水分が蒸発して軽くなり、より遠くまで飛散できるようになります。一方、人の身体は寒さで体温が下がってしまい、基礎代謝も低下して免疫力が下がり、ウイルスに感染しやすい状態になります。

ノロは食中毒のウイルスですが、インフルエンザなどと同じく空気が乾燥している方が活動的になります。食中毒のウイルスはノロのほかにもあり、実は食中毒が一番多い季節は

冬なのです。

インフルエンザもノロも、感染してしまうと症状は重いです。感染したときの辛さを考えるとかかりたくないですよ。そのために予防が大切です。まず、うがい・手洗い・マスクによる感染経路の遮断。次に、十分な睡眠と栄養で抵抗力を高める。そして、室内の加湿や温度調節でウイルスの活動性を低下させます。食品からのノロウイルス感染予防には、汚染食品の加熱や調理器具の洗浄・消毒が効果的です。

インフルエンザにはワクチンがありますが、だからといって予防注射を受ければ感染しないわけではありません。しかし、予防注射を受けていれば感染しても症状が軽くなる傾向が多いのでお勧めです。そして、ノロにはワクチンも治療薬もありませんし何度もかかります。ノロには予防しかありません。

みなさん、辛いのはイヤですよ。冬に備えて日頃から予防法を実践し、ウイルスに負けないようにしましょう。



アジア研修交流二〇一九

アジア研修交流事業担当

渋沢 浩二

今年度の「アジア研修交流プログラム」は、ミャンマーからエデン障がい児センター職員のアグペディさんをお招きし、七月三十日から八月十五日までの三週間、研修を行いました。

アグペディさんはエデン障がい児センターの創立者の一人であり、障がい児支援の働きを長年続けてきました。ミャンマーでは、政府からの支援がほとんどない中で、主に寄付金によってセンターが運営されています。偏見と、理解の進まない社会で、障がい児を持つ保護者への働きかけや、障がい児をどのように地域で受け入れていくかが大きな課題であると語っていました。

初めての日本で、アグペディさんは、天ぷらや寿司、煮魚、和食の付け合わせなどを好んで食べていました。特にアガペセンターの食事は故郷のチン族の食事と似ていると喜んでいました。

研修では、アガペセンター、アガペ東京センターの施設の他、えびな支援学校、松風園、神奈川県総合リハビリテーションセンター、精陽学園、しんわろネットサンス、こども医療センターを見学しました。特に児童発達支援や生活介護の事業所では、熱心にノート



閉校式 チン族民族衣装のアグペディさん（中央）

を取り、質問をしていました。また、施設の職員が、利用者に対して優しく接している姿に感銘を受けていました。そして、利用者個人の必要に応じた計画書を作成し、丁寧にサービスを提供している姿を見て、学ぶ点が多かったようでした。

インクルーシブ教育の実践に対しても興味を持ち、どのようにして障がい者が普通の学校や地域社会に受け入れられているのかについても熱心に学んでいました。

社会の仕組みや福祉制度、経済的事情も異なるミャンマーで、すぐに行けること、今後取り組んでいきたいことなどを整理し、今できるところから実践していきたいとの意気込みを語っていました。

サニーキッズには医療的ケアを必要とするお子さんへの支援、検診や感染症予防、日常的な怪我や病気に対応するため、看護師が配置されています。医療への高い専門性に加え、キッズの看護師は保育士資格も有しており、日常的な療育支援でもその力を発揮しています。彼女の支援からは職種を越えた、熱意と深い愛情を感じ取れ、保護者を含め多くの人が信頼を寄せています。

（永田園長）

余暇活動として、上野の東京都美術館や江戸東京博物館、横浜の歴史博物館やカップヌードルミュージアムを訪れ、日本の歴史文化に触れる機会を持ちました。また、広島への日帰りツアーを計画し、原爆ドームと平和記念資料館を見学しました。これらの文化交流を通して、互いの国の文化の違いを理解するとともに、人類共通の願いである平和について深く考える機会になったようです。週末には、通訳をしてくださったサンサン牧師の杉並中通教会に宿泊し、礼拝に集うことで、在住のミャンマーの方々との交流の時を過ごしました。短い研修期間でしたが、帰国後は、障がい者支援の働きのために活躍されることを大いに期待しています。



サニーキッズの看護師さん



保育士としてクラスを担当しながら、看護師を兼務させてもらっています。どのようにしたら子ども達が、楽しみながら課題や遊びに参加でき、成長につなげていくことができると日々考え勉強しています。保育士として子ども達と接している経験が、看護師として子ども達に接する時に役立っています。自宅や幼稚園、サニーキッズなど子ども達が生活をする場では、感染予防や医療的ケアの方法ひとつにしても、生活の中で実施することを前提にしています。

子どもにそれぞれ生活があるのと同じくらい方法があり、看護師としても日々勉強が必要です。はじめは兼務することに自信がなかったのですが、職員や保護者として子ども達に支えられながら、とても楽しく働くことができ感謝しています。



（看護師・保育士兼務 鈴木 美奈子）

切手の回収

生活支援員 鈴木 経生

もくせい園では作業の一環として、切手の回収を行っています。

切手は近隣の方々によるご厚意で集められています。コミュニティセンターや市役所、出張所には切手の回収箱を置かせていただいています。

これまでこの切手の回収は不定期でしたが、今年から月に一度、四カ所を利用者さんと回収に行くことにしました。

きっかけは回収箱設置場所へのご挨拶と、「外に出て色々な経験をしたい。」「会話を楽しみたい。」「ありがとうと伝えたい。」という利用者さんの



もくせい園を代表してご挨拶

もくせい園

活動報告



「たくさん入ってたね。」

思いが、切手回収の場面で活かせるのではないかと思ったからです。

初めはどうして良いかわからない様子もありましたが、今は自分の名刺を差し出し挨拶する人、ありがとうと伝える人、それぞれが役割を持って取り組んでいます。

東原コミュニティセンターで出くわした散歩中の犬に顔をなめられるという、びつくりする出来事もありました。また（回収に）行くうね。」と利用者さんにとってやりがいと楽しみになっているようです。

回収先では「こっちも寄って行って。」と声をかけられるようになり、園との繋がりが芽吹いているのを感じています。

〈お願い〉

もくせい園では使用済み切手を集めています。ご協力をお願いします。

同窓生は今



池上 宙大 さん
いけがみ ちゆうだい

現在のお仕事について教えてください。

私は、(株)4℃ホールディングスの、特例子会社ハートフルアクアで、アクセサリーのラッピング用のロボンのカットや、取扱説明書に会社のスタンプを押すなどの仕事を中心に行っています。

働いてみてどうでしたか？

最初はとても緊張していましたが、最近は新しい仕事にも取り組めて慣れてきました。もう三年目になり、自分でもびつくりです。

働いて嬉しかったことはなんですか？

今の職場の人達と上手くやれていることと、仕事が楽しいと思えることが嬉しいです。

また職場の大会や初詣などがあり参加することが楽しいです。

アガベの利用者さんに一言お願いします。

自分のできる能力をつかんで、チャレンジしていけば出来ることがあるとと思うので、体調に気をつけて頑張ってほしいと思います。

共に生きる

高座教会 宮城 献

「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」

(詩編二三編一節)

共に腰かけ座るように、共に生きることは、恵みであり、喜びだと聖書は語ります。恵みとは、神さまからの贈り物ということです。私たちが共に生きる仲間、神さまからのプレゼントなのです。けれど、時に、仲間と共に生きる中で、大変なこともあります。でも、それでも聖書は、共に生きることが喜びだといふのです。仲間と共に、その困難を乗り越えた時、喜びを分かち合うことが出来るからです。それは、一人で喜ぶよりも、もっと大きな喜びになります。神さまが贈って下さった仲間と共に生きる、喜びを味わっていききたいと願います。

お知らせ

アガベで働くスタッフ募集中
見学受付けています。

アガベセンターの
QRコードです。
ホームペーは
こちらから

